



Title	対話小説への道：J・J・エンゲルの理論と実践
Author(s)	廣川, 智貴
Citation	ドイツ啓蒙主義研究. 2022, 19, p. 17-30
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/88384
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

対話小説への道

—— J・J・エンゲルの理論と実践 ——

廣川 智貴

はじめに

小説とは何かと問われれば、はたしてどのように答えるだろうか。おそらく、それぞれの読書経験に応じて、多種多様な回答が可能だろう。だが一般的なイメージというものもあるにちがいない。卑近な例で恐縮なのだが、たとえば、現代文の教科書や大学受験参考書がそうしたイメージを知るうえでよい例を提供してくれるように思われる。このような書物の小説に関連する箇所を目をやると、われわれはしばしば作中人物の心情に関わる問いを目にする。つまり、小説には人物の心理が描かれているということが、いわば暗黙の了解となっているのである。

ドイツ文学がとりわけこうした心理描写に注目するようになったのは 18 世紀後半のことであった。この意味で画期的に思われるのは 1774 年である。というのもそれは、主人公の内面を赤裸々に表現したヨハン・ヴォルフガング・ゲーテの書簡体小説『若きウェルテルの悩み』が出版された年であり、小説における心理描写に重きを置いた大部の理論書であるフリードリヒ・フォン・ブランケンブルクの『小説試論』が世に出た年だったからである¹。これらふたつの作品が同じ時期にあらわれたのはおそらく偶然ではない。というのも、津田保夫も指摘しているように、身体と精神の関係について考察する「人間学」の影響から、小説においても人間の心理的側面に光があてられはじめたからである²。

本稿で取り上げるヨハン・ヤーコプ・エンゲル (1741-1802 年) は、このような作中人物の心理描写を重視する小説という試みに寄与したひとりであった。今ではほとんど忘れられている存在なのだが、存命中はレッシングとならび称された作家でもあった³。たとえば、ハインリヒ・ハイネはその著『ドイツの宗教と哲学』において、メンデルスゾーン、ズルツァー、ガルヴェ、モーリッツなどとならぶベルリン啓蒙主義を代表する人物としてエンゲルの名を挙げている⁴。エンゲルは『世の中のための哲学者』(1775-1800 年) を編集した通俗哲学者として、また演技論『演技のための理念』(1785/86 年) や国民劇場の支配人として活躍した演劇家として⁵、さらにはフンボルト兄弟や皇太子時代のフリードリヒ・ヴィルヘルム 3 世に個人教授をおこなった優れた教師として同時代に影響を及ぼした。そうした彼の一連の仕事のなかで、小説の発展にとって興味深いのは、『若きウェルテルの悩み』と『小説試論』と同じ 1774 年に公にされた小論『行為、対話、語りについて』(Über

Handlung, Gespräch und Erzählung、以下『行為』と略す)である。この論文のなかでエンゲルは、文学における「行為」を定義しなおし、その動機を心理と結びつけることで、小説における心理描写への道を拓いたのだった。さらに彼はこうした理論的な考察だけでなく、実際に対話小説 (Dialogroman) を書くことでその表現の可能性を確かめようともした。本論文では、まずは『行為』を手がかりにしてエンゲルの理論を検討し、それをふまえて小説『ローレンツ・シュタルク氏』 (*Herr Lorenz Stark*、雑誌『ホーレン』第4巻 (1795年)、第5巻 (1796年) に一部掲載したのち 1801 年に出版) を概観したい。

1. 『行為』の前史としてのゲスナー批評

本論文の底本はエルンスト・テオドール・フォスによる編集版である。この書物の構成はよくできており、『行為』第1稿のテキストだけでなく、この論文の理解に必要と思われるエンゲルの別のテキストもあわせて収録されている。これら一連のテキストのなかでもとくに言及しておきたいのは、エンゲルがザロモン・ゲスナーの『新しい田園詩』 (*Neue Idylle*) を書評したものである。これは『行為』の前年である 1773 年に発表され、おそらくは若きゲーテによる牧歌の批評を契機として書かれたものである。ゲーテはその批評においてゲスナーの牧歌の表現を次のように痛烈に批判している。

だがそれは文学の経験をおおいに欠いたものではないだろうか？ これらの牧歌のどの箇所においても、行為する人々が互いへの本当の関心を持っていないのだから。それは語りによる冷たいモノローグのようなものである (…)⁶。

エンゲルは「このすぐれたゲスナーについてわれわれは、すでに一度ならずこのように言われるのを耳にしてきた」と前置きし、またおそらくはゲーテの上述した批評を意識しながら、牧歌に向けられる否定的な声を以下のようにまとめている。

この男は描写する (malend) 詩人にすぎない！ 彼の偉大な才能は生気をなくした自然を描写するだけなのだ！ この詩人が風景をかざる人間ときたら、実際の人間などではない！ そのような人間を導入するやり方はきわめて冷酷で弱々しい！ ほとんど対話といったものがなく、つねに語っているだけなのだ！ (119)

だが、われわれは「ゲスナーは一般に言われているような描写する詩人なのだろうか？」と問うてもよいのではないか。たしかに彼は自然を描写してはいる。しかしその「主要目的」はただ単に「生気ない自然、あるいはいきいきした自然をたよりにして外的な形を描写すること」ではない。つまり、エンゲルに言わせれば、一般に批判の的となっている描

写は、それ自体が目的なのではなく、あくまでも「それがこれらの行為（Handlung）や感情（Empfindung）に影響を及ぼすかぎり」（119）においておこなわれているものなのである。このようにエンゲルは、「描写」を「行為」と結びつけることで、ゲスナーを一般的な批判から救済しようとするのである。

このゲスナー書評においてすでに「行為」概念が登場していることは注目に値するが、さらに『行為』のタイトルにもある「対話」と「語り」という形式に触れられていることも重要であろう。先述したゲーテの批評からもうかがわれるように、人々は「彼〔＝ゲスナー〕が人物を導入するやり方を、彼の詩的才能の欠如を具体的に証明するものだと考えている」、とエンゲルは言う。さらに彼は、そうした人々には「独白や物語ではなく、対話、それもじつに迅速で熱烈な対話を持とうとする」（128）傾向があるようだ、と指摘する。そこでエンゲルは、ゲスナーが牧歌のなかで行為や状況を描写するにあたり、もしも読者が望むような対話形式を使用すればどうなるであろうかと思いをめぐらせる。その結論は単純明快である。そこからは何も生じないというのが彼の見解である。たとえば、人間については「論文でも、物語でも、演劇でも述べることができる」（128）。これらの分野で優れた業績を残したディドロは論文形式で人間を語ったのだった。エンゲルに言わせれば、彼がこの形式を選択したのであれば、読者にもそれが気に入るはずなのだ。もちろん、もしも他の形式で述べていたならば、と望むことはできるだろうが、私たちが「知らなければならないのは、どのような種類の陳述もそれ独自の完成度をもつということ」（128）なのである。

このようにエンゲルは作家が選択した形式それ自体を評価するよう読者に勧めるのだが、加えて形式と対象との関係についても述べている。「どの陳述もそれ独自の完成度をもつだけでなく、別の種類ではそれほど際立つことのないような独自の対象をもっている」（128）と言われているように、それぞれの陳述の形式にはそれに適した対象があるというのである。この意味で、「すべてを対話化しなければならない劇作家」は不利であり、かなり制限された対象を扱うことになるだろう。他方で、「この点で望みうるあらゆる自由を有している叙事詩人や小説家」（128）は、それだけに多様な対象を扱うことができるだろう。いずれにせよ作家は対象にふさわしい形式を選ぶことにも配慮しなければならないのである。

こうした考えをエンゲルは具体的にゲスナーの作品で検証している。たとえば彼は、『新しい田園詩』に収められ、散文で書かれた「ミュコン」を取り上げ、これが対話として表現されたらどうなるだろうかと問う。この作品には、「神に生贄を捧げようとアポロの神殿へと赴くふたりのさすらい人」（129）が登場する。彼らは真昼の暑さに耐え、今にも干からびそうなのだが、そうした描写には対話はふさわしくない、とエンゲルは断言する。というのも、「ふたりのさすらい人はただ単調なものを感じることができただけ」（129）だからである。そうした気持ちをだらだらと作中人物に語らせるよりも、語り手が「単純に語る方がはるかによかろう」（129）とエンゲルは続けて言う。

さらにエンゲルは『新しい田園詩』に収められたごく短い作品「テュルシス」にも言及

している。ここにみられるコメントはごく簡単なものなのだが、その内容は後の『行為』にも通じるように思われる。テュルシスと少女との淡い恋が描かれるこの作品について、エンゲルはこう述べている。

たとえば、牧歌「テュルシス」にみられる内気で臆病な愛のように、情熱の性質がたいていはため息、姿勢、パントマイムによってのみ表わされるとすれば、詩人はこのため息、姿勢、パントマイムを語ることにしかできない。せいぜいのところ、情熱の性質がなお許容するような、とぎれとぎれの談話（Rede）をあちこちに挿入することしかできない。（128 強調は引用者による）

ここで注目したいのは、人間の心理を再現して語ることでしか伝えられないという、いわば語り手の限界が告白されている一方で、そうした真理は散文においても「談話」で表現できるという可能性にふれられていることである。つまりエンゲルはゲスナー批評において、「描写」と「行為」を結びつけてこの牧歌詩人を救済するだけでなく、散文における「語り」と「対話」という形式の相互作用についても示唆しているのである。

2. 「行為」（Handlung）概念について

シュテファン・トラッペンは、アリストテレスによる「あらゆる種類の詩は模倣である」というミメシスの定義が、ドイツ啓蒙主義詩学においていわば権威として機能していたが、他方で欠点も有していたことを指摘している。一言で言えば、「ミメシス」や「イミタツィオ」がいったい何を意味しているのかが不明瞭だというのである。そうしたなかで、こうした議論を前進させたものとして、トラッペンは「レッシングの『ラオコオン』を極地とする詩と絵画の関係についての考察」、「観客が悲劇的对象に満足を感じる理由」についての考察、「文学の領域における行為（Handlung）の意義の考察」を挙げている⁷。エンゲルの『行為』は、そのタイトルから明らかなように、この最後の「行為」に関する考察に重きを置くものである。

この「行為」という概念について、啓蒙主義期の詩学、いやそれどころか今日に至るまで大きな影響を及ぼし続けているのは、言うまでもなくレッシングの『ラオコオン』（1766年）であろう。小田部胤久も指摘するように、当時の詩学においては、ホラティウスの「詩は絵のように」という言葉が「詩と絵画の類似性を要請する一種の命法」⁸として人口に膾炙しており、それゆえにこれらふたつのジャンルの境界はきわめて不明瞭なままであった。そうしたなかであって、レッシングによるこの理論的著作は、詩と絵画が使用する記号およびその対象を明確にすることで、これらのジャンルの境界を確定しようとした野心的な試みであった。

レッシングによると、絵画は並列的記号を使用し、詩は継起的記号を用いるので、その対象もおのずとこれらの記号の性質によって規定されるという。あまりにも有名な箇所だが、エンゲルの『行為』にとっても重要なので引用しておこう。

並存する対象、あるいはその諸部分が並存するところの対象は物体 (Körper) と呼ばれる。したがって、目に見える諸性質をそなえた物体こそ絵画本来の対象である。

継起する対象、あるいはその諸部分が継起するところの対象は一般に行為 (Handlung) と呼ばれる。したがって行為こそは、文学本来の対象である⁹。

要するに、並列的記号を使用する絵画は並列的对象としての物体を、継起的記号を用いる詩は継起的対象である行為を表現すべきだ、というのがレッシングの主張である。

エンゲルは『行為』においてレッシングを「私の知るなかでもっとも鋭い芸術批評家」(17) と呼んでいる。このように彼はレッシングを批評家としてきわめて高く評価していた。だがそれは、エンゲルがこの偉大な批評家の仕事を無批判に受容したということの意味しない。むしろ優れた先人を批判的に乗り越えようとするのがエンゲルの方法だった¹⁰。そこでここでは、この両者の相違点が際立っているように思われる「描写」と「行為」の定義を手がかりにして、話を進めることにしよう。

エンゲルは彼の詩学における基本概念のひとつである「素材」(Materie) を「描写」(Beschreibung) と「行為」(Handlung) に分類している。これは先述したところの『ラオコオン』にみられる中心的論点を想起させる。だが、ハンス＝ゲルハルト・ヴィンターも指摘しているように、エンゲルがレッシングとは異なってこれらふたつのものを「並列的な出来事」にも「継起的な出来事」にもともにあてはまると考えていたことは注目に値する¹¹。つまりエンゲルにあって「並列」と「継起」は、その境界を失ってしまうのである。この点に深く関わっているのが、エンゲルによる「行為」と「出来事」の区別である。

『行為』の冒頭でエンゲルは、「事物の状態」の扱い方には二種類あると述べている。すなわち、「ある事物のそれぞれの状態」は、「それ [= 状態] がもたらされた原因を先行する一連の状態のうちにもっている」ものである。そしてその取り扱いは、「その状態が由来するところの原因を顧慮せずにそれ [= 状態] をあるがままに扱う」か、「この原因を顧慮するかにかかっている」という。したがって、「事物の状態」については、「その事物の状態はどのようなものであるのか」という問いと「いかにしてそのような状態に至ったのか」

(6) という問いを立てることができる。結論を先に言えば、前者が「描写」の対象であり、後者が「行為」の対象というわけである。

抽象的な議論をあまり好まないエンゲルは、こうした「事物」の取り扱いの相違を明らかにするために、歴史編纂者を例として挙げている。エンゲルは詩人が出来事の背後にある「秘かな動機」を発見する方法を当時の歴史学にちなんで「実用的 (pragmatisch)」(12) と呼んだ。啓蒙主義期の歴史家たちがこの概念のもとで理解していたのは、「歴史的出来事

の因果関係の解明」であった¹²。こうした意味での「非実用的な歴史編纂者」は、「悪名高いクロムウェルを人生のすべての場面で登場させて私たちに示すだろう」、とエンゲルは言う。すなわちこうした歴史家は、「どのように彼〔＝クロムウェル〕がまずはただの私人から軍の将校となり、ついでその上級指揮官となり、それから議会の支配的な主人となった」(9)のかといった客観的情報を次々と挙げるだろう。しかし、ただの私人にすぎなかったクロムウェルが、なぜそれほどまでに「強力な支配者」(9)になったのかは教えてくれない。要するに、この種の歴史編纂者は、「内的・外的状態のきわめて連関のある連なりを、貧弱でもぎ取られたただの出来事の連続へと変えてしまう」(10)のである。他方で「実用的な歴史編纂者」は、「秘かな原動力を明らかにする」(12)だろう。彼は一方でクロムウェルの性格を、他方で当時のイギリスの社会状況を考慮し、クロムウェルの意図から意図への移行を明らかにするにちがいない。つまりここでは、ただの「記述 (Beschreibung)」から本当の歴史 (Geschichte) が生じる」(12) というのである。

こうした検討をふまえて、エンゲルは文学における「行為」へと話を移し、「以下に述べることほど、この語を正確にまた実りあるように説明することはできないと思う」(15)と前置きしたうえで、この主要概念を以下のように定義する。

ある詩のなかで「行為 (Handlung)」が存在するのは、そこで私たちがある「意図をもって作用する」ような「ある人物の活動による変化」が生成 (werden) するのを目にすると、あるいはそのかぎりにおいてなのである。(15)

この引用が端的に示しているように、エンゲルにとっての「行為」とは、何よりも「意図」によって「生成」される「人間の行為」¹³であった。それゆえに彼は、「あらゆる行為の本来の場は考えたり感じたりする心 (Seele) なのである」(25) とも言うのである。ところで、今日のスタンダードのひとつであるゲーロ・フォン・ヴィルペルトの文学用語事典にみられる「行為」(Handlung)の項目も、エンゲルによる「行為」概念の定義を想起させる。ヴィルペルトによると「行為」とは、

心の内部の意志表明を行為へと置き換えることであり、実用的 (pragmatisch) ジャンルの内容・構造要素の中心をなす。また、叙事文学においては主要人物やそれに対抗する人物の行動によって方向づけられる事件の経過、とくに劇作品においては紛争の不可欠な原因である¹⁴。(強調は引用者による)

要するに、エンゲルの「行為」概念とは、単なる時間的な継起を意味するだけでなく、このような心理的な側面を持つものであり、現在の「行為」概念の定義にも連なるものなのである。

3. 「対話」と「物語」という形式について

これまでわれわれは、エンゲル詩学の「描写」と「行為」を検討し、とりわけ後者が彼の詩学にとって重要であることを確認してきた。そこで次に問題となるのが、そうした「素材」をいったいどのような「形式」で表現するかということである。すでにタイトルにも端的に示されているように、この点でエンゲルにとって重要なのは「語り」と「対話」であった。

エンゲルをこうした形式の考察へと促した動機のひとつは、ヨハン・ゲオルク・ズルツァーへの不満であった。たとえば、1773年に盟友クリスティアン・ガルヴェに宛てた手紙において、エンゲルは次のように語っている。

私は対話 (Dialog) についての見解をかなり集めました。それらを小論に活かそうと思っているのです。ヴァイセは『叢書』(*Neue Bibliothek der schönen Wissenschaften und freyen Künste* を指す) のための論文を私に求めておりまして、復活祭の頃までには仕上げなければなりません。このテーマはかなり新しくかつ重要でしょう。(…) ズルツァーは彼自身の事典に「対話」(Gespräch) の項目を設けています。しかしそこで言われていることは、私にはあまりにも当たり前であるように思われるのです。ですから、それについて繰り返し述べることは、労に値するとは思いません。ズルツァーは解説と二三の一般的なコメントを付しているのですが、ほんのわずかも特殊なものに立ち入ることはないのです¹⁵。

手紙の書かれた時期からして、ここで言及されている「小論」とは『行為』のことであろう。エンゲルはズルツァーの記述に「対話」の具体的な検討が欠けていることを指摘し、みずからこの「小論」を書くことで、その欠を補おうとするのである。

それではエンゲルはどのようにしてズルツァーの考えを補足しようとするのだろうか。「ある事柄の性質」は「それと対立する事物との比較をとおしてのみ認識される」(55) と考えるエンゲルは、「語り」と「対話」というふたつの形式に着目し、それらを比較することでそれぞれの特徴をあきらかにしようとする。複数のものを比較するにはいわゆる「比較の第三項」が必要だが、エンゲルは時間をそうした項目として設定して比較を試みる。エンゲルによれば、「語り」とは過去という歴史的な観点から解釈できるものであり、他方で「対話」の性質は「直接的な現在」にこそあるという。そうして得られた分類の結果を、エンゲルは「行為」概念と関連させて以下のように述べている。

「語りにおいては行為 (Handlung) はすでに起こってしまっている」。また「対話において行為はまさにいま眼前の瞬間に起こっている」。前者においては、聞き手を考慮し、自分が語ることにについてある種の目的をもっている証人が、それに関連する情報を提

供する。劇においては、私たちはいわば偶然にあらわれ、語る人物は自分自身に関する証言以外のことをまったく知らない。自分自身が互いに主張しようとする意図以外のことをまったく知らないのである。(55f.)

このようにエンゲルは、「語り」を過去に、「対話」を現在に位置づけ、さらにこうした基本的な相違から、「何よりも重要な第二の区別」を導き出す。すなわち彼は、「物語は行為する人物 (Seele) のそのつどの状態について、またそれに先行するあらゆる変化の正確な全体の連関について、特殊で、明確で、完全な観念を、対話ほどには与えることはできない」(57) と断言するのである。すでに述べたように、エンゲルは「行為」を「生成」と関連づけていたが、この点からみても「対話」はそのつどの変化を表現するのに適した方法であるように思われたのである。

エンゲルはこの「第二の区別」からさらなる命題を導いている。「対話においては、物語におけるよりも、はるかに多くの行為 (Handlung) が可能である」(70)。エンゲル自身も少し抽象的だと思ったのか、こうした命題の提示に続けて、文学作品の創作という観点から具体的に以下のように説明を加えている。

人物の描写については、物語形式よりも対話形式の方がはるかにすぐれているということである。前者の形式は心の状態については常に一般的な概念しか与えないので、行動する人物が登場人物であるところでも、人物の一般的部類以上のものを述べることができない。それに対して後者は、この人物を全体的で繊細な混合において、あらゆる独自の明暗で特殊なものに至るまで、そして望みさえすればポートレートとしてわれわれに描写することができるのである。(70)

このようにエンゲルは、対話がすぐれて「人物の描写」を、つまりキャラクターを表現するのに適する一方で、物語は「一般的な概念」を提示するにとどまると考えるのである。

エンゲルはドイツ語の特性もこうした「対話」の機能に有利に働くと考えた。というのも、「われわれの言語」であるドイツ語は、「きわめて感情のこもった力強い対話をおこなうための、実にすばらしい資質を備えている」からである。もっとも彼は「われわれのところでは、このジャンルについて他の国民に比べてますますよいものが少なくなってゆくのではないか」と危惧してもいる。ドイツ語のように多様な観念の表現が可能な言語にあっては、それだけに「対象をきわめて繊細なニュアンスに応じて現前化させる技術の心得、および比較的にいきいきとしたあたたかな想像力が作家には求められる」(59) からである。つまり作家には「独自の心の状態へと押し入るようなより偉大な才能が求められている」(59f.) のである。

翻ってみれば、「対話」と心理との関連を指摘したのは、何もエンゲルが最初というわけではない。すでにクリスティアン・トマジウスは、対話をとおして心の中を覗くことがで

きると考え、対話による情動（Affekt）の観察を強調していた。また、『行為』において言及されているズルツァーも、対話の利点について以下のように述べている。

人間の内奥を見抜く最善の機会、その人が声に出して考えるのを、気づかれないようにして聞くことだと考えねばならないだろう。だがさらにより手段がある。すなわち、その人がなんら用心することなく、他人と話をしているのを聞くことである。というのも、この他人は、反論やら励ますなどして、あるいはその考え方をとおして、よりいきいきと明確に自己を表現し、その心全体をさらに展開する機会を与えるからである。（…）それゆえに対話（Gespräch）とは、考え方や感じ方をお互いに展開しあう人々の話し合いを模倣したものなのである。¹⁶

このように、すでにエンゲル以前にも「対話」と心理の結びつきを指摘した人はいたのだが、こうした一般的な議論をふまえつつも、それを「行為」という概念に関連させ、さらに小説という新しいジャンルにおいて「対話」を応用しようとしたところにエンゲルの独自性があったと言えよう。

4. 対話小説『ローレンツ・シュタルク氏』

われわれはこれまでのところで、エンゲルが「行為」という概念を心理的に解釈し直し、その表現には「語り」よりも「対話」という形式が適しているということを確認した。ただ、エンゲルにおける一連の議論を追うなかで興味深く思われるのは、彼が『行為』の冒頭においてすでに、ふたつの形式の混合の可能性を念頭においていることである。

たとえば、物語と対話は、物語であり対話のままである。だがこれらはそれ自身のジャンルにおいてあらわれるか、別のジャンルの作品においてあらわれるかで、まったく別の色彩やまったく異なるトーン（Ton）を得る。つまりそれらは、叙事的作品であらわれるか、劇的作品であらわれるか、それとも叙情的作品であらわれるかによって異なるのである。（5f. 強調は引用者による）

ここでエンゲルは、「物語」形式なら小説、「対話」形式なら戯曲に属するといった単純な対応関係だけでなく、それぞれの形式が他のジャンルでも使用される可能性を示唆している。たしかにエンゲルはそれぞれの表現方法の利点を認めてはいる。彼は「対話」の方が「物語」よりも「行為」をうまく表現できると評価する一方で、他方では「物語」には「時に大きな、時に小さな跳躍をおこなう自由」（71）があると述べているからである。もしも重要なことが何も起こらず、本質的な意味で「行為」に属するものでなければ、「大きな時

間」を省略して語ることができるだろう。こうしたそれぞれの利点を活かすために、エンゲルは「対話」と「物語」とを混合しようとするのである。

むろんこのことは、それぞれの形式がどのジャンルでも勝手気ままに使用できるということの意味するのではない。各形式は他のジャンルで使用されれば、本来のジャンルで使用されるのとは異なる「トーン」を獲得する。エンゲルによると、「戯曲のトーン」とは「単純で急ぐ」ものであり、「叙事的なトーン」とは「豊かで発展させる」(43) ものだという。つまり、「それぞれの文芸の性質は、作品に主要なトーンを与えているあれこれの混合に応じて、少しは違ったものとなるのである」(43f.)。

エンゲルはこうしたいわばジャンルの混合の例をいくつか挙げている。たとえば、「偶然に対話の形式をした議論」の例として、クセノポンの『ヒエロン』が挙げられている。この作品においてシモーニデースは、君主と私人ではどちらが幸福かを知ろうとする。シュラクサイの専制君主 [=ヒエロン] ほどこの問いに答えるにふさわしい者はいないように彼には思われる。君主となる前は私人であったヒエロンなら、ふたつの身分のあり方を比較できるからだ。彼らの間のやり取りは一見「対話」のようである。だが、「われわれの眼前に提示される各場面において、一歩ずつあらゆる瞬間を通して行為を追う」(74) こと、つまり「生成」の表現が「対話」であるとするならば、ここでの対話はその意味での「対話」とは言い難い。彼が語るのは「かつての熟考によって、かつての心の行為によって発見されたもの」(39)、つまり過去に属するものと言えるからである。「対話」の形を装いつつも、実際のところはかつての行為を報告しているにすぎない。語り手は「対話」を使用してもやはり過去から逃れることはできないのだが、そこから物語における「対話」のもたらす独自の「トーン」が生じると言えよう。

エンゲルはこのように言わばジャンルの混合を考えるのだが¹⁷、この問題を検討するにあたってわれわれの関心を惹くのは、彼が理論的な考察だけでなく、そこで得られた成果を実際の作品において試そうとしていることである。対話小説『ローレンツ・シュタルク氏』がそれである¹⁸。この作品の主題は、道徳に厳しいドイツ的な父親とその父に誤解された息子との世代間の争いというありふれたものである。

注目したいのはこの作品の成立過程である。というのも、この小説はそもそも喜劇『ドイツの家長』として構想されていたからである。着想はエンゲルがライプチヒで学生生活を送っていた時期にまでさかのぼる。同じくライプチヒで学んでいたゲーテとは、素人芝居でレッシングの『ミンナ・フォン・バルンヘルム』を演じたこともあったようだが、いずれにせよこうした多感な時期に『ドイツの家長』は構想され、1776年には3幕が書き上げられたという¹⁹。だがこの喜劇は最終的には小説の形をとることになった。こうした成立の背景はエンゲルの周辺にも知られていたようである。たとえば、『ローレンツ・シュタルク氏』が連載された雑誌『ホーレン』を編集したシラーは、「フンボルトが私に書いてよこしたように、『ローレンツ・シュタルク氏』はかつて喜劇になるはずだったのですが、偶然にも物語形式になりました」²⁰（強調は引用者による）とゲーテに伝えているし、『ロー

レンツ・シュタルク氏』の当時の書評にも、「書評者がたしかな筋から知るところによれば、そもそもこの物語の素材は、戯曲のために定められたものであった。今は亡き著者は『ドイツの家長』というタイトルでそれを構想していたのである」²¹と記されている。

だが、シラーがここで言っているように、『ローレンツ・シュタルク氏』がはたして「偶然にも」小説になったのかどうかは疑わしいように思われる。というのも、『ローレンツ・シュタルク氏』には、戯曲の名残と思われる要素が偶然にしてはあまりにも散見されるからだ。たとえば、第7章の冒頭「シュタルク氏はザクセン、ブランデンブルク、ハノーヴァー、ブラウンシュヴァイクの三分の二ターラーでいっぱいの机の前に座っていた」²²や、これに続く第8章の冒頭「シュタルク夫人はすでに少しのあいだ自分の部署に立っていたのだが、ようやく会話がよからぬ方へと向かっていることに気づき、こちらに入ってきた」²³などは、あたかも戯曲のト書きをそのまま小説に取り入れたような印象を与える。さらには、「偶然にも」小説になったと述べていたシラーも、エンゲルの原稿を受けとった頃にゲーテに宛てた手紙において、この小説に戯曲に不可欠な「対話」の要素が見られることを的確に指摘しているのである。「数日前、エンゲルも私に三全紙を超える原稿を寄こしました。それは一般読者にはふさわしい内容のもので、一部は対話で、一部は物語で書かれているものです」²⁴（強調は引用者による）。『ローレンツ・シュタルク氏』の成立に先立って、「行為」、「対話」、「物語」の問題を詳細に検討していたエンゲルのことである。戯曲から小説へというこの改作は、小説において戯曲の「具象性」²⁵を求めようとする試みであったように思われる。

当初『ホーレン』に連載された『ローレンツ・シュタルク氏』は、こうした劇的な要素が功を奏したのか、読者にも好意的に受け入れられたようである。たとえば当時の書評でも、「活気や具体的な効果を少なからず得る」²⁶とところの物語の対話構造が強調されている。また、フリードリヒ・シュレーゲルも、たとえ「描写された二三の人物、とくに息子が(…)少し観察するだけで好意的な気持を」もたらさなかったとはいえ、作品にみられる「劇的な具象性と繊細な性格描写」²⁷を評価したのだった。エンゲルの意図は見事に実現され、『ローレンツ・シュタルク氏』によって対話小説というジャンルの可能性も開かれるように思われた。だがこの好景気は長くは続かない。早くも1798年にはその同じシュレーゲルが、エンゲルの「無価値なものを扱い、飾りたてる術を心得ている態度」²⁸を嘲笑しているからである。このシュレーゲルの評価が象徴するように、エンゲルはその後いわゆるヴァイマル古典主義や初期ロマン派の作家たちによって酷評され、人々の記憶からは忘れられてゆくことになる。しかしそれでも、『ローレンツ・シュタルク氏』は、1774年に始まるドイツ小説の心理化の過程を検討するうえで、決して無視することのできない作品であるように思われる。

おわりに

今日、われわれは作中人物の心理が描写され、それを追うのが当たり前であるかのように小説を読んでいる。周知のように、今日に至るまでに内的独白や体験話法といった、小説における心理描写の技法には磨きがかけられてきた。そうした技法に親しんでいるわれわれからすれば、全知の語り手を前提とするエンゲルの議論をいま取り上げるのは、時代遅れも甚だしいと思われるかもしれない。だがそれにもかかわらず、「行為」という概念を心理という側面から再定義し、その表現の可能性を考察したエンゲルは、しばしば言及されるブランケンブルクとともに、小説の心理化の礎を築いたと言える。たしかにエンゲルは、シュレーゲルの評価が示しているように、後の世代によって厳しい批判にさらされ、人々の記憶から失われていった。だがそうした批判の激しさは、むしろエンゲルの存在が当時の作家たちにとってどれほど大きかったかを物語っているとも言えよう。エンゲルのようないわゆる通俗哲学者・作家たちの仕事がなければ、ゲーテやシラーによるヴァイマル古典主義、そしてロマン主義という大輪もあれほどまでには開かなかったかもしれない。

本稿では、紙幅のこともあり、『ローレンツ・シュタルク氏』を十分に分析することができなかった。また、『行為』で基本的な理論的考察を終えたエンゲルは、モーゼス・メンデルスゾーンなどの刺激を受け、さらに『文芸ジャンル理論の最初の基盤』（1783 年）において文芸理論を展開するのだが²⁹、これらについては他日を期することにしたい。

使用テキストは以下のとおりである。前者のテキストからの引用は、本文中にページ数のみを記した。

Engel, Johann Jakob: *Über Handlung, Gespräch und Erzählung*. Hg. von Ernst Theodor Voss. Stuttgart 1964.

Engel, Johann Jakob: *Herr Lorenz Stark. Ein Charaktergemälde*. Hg. von Alexander Košenina. St. Ingbert 1991.

参考文献

Becker, Eva D.: *Der deutsche Roman um 1780*. Stuttgart 1964.

Blatter, Christoph: *Johann Jakob Engel (1741-1802). Wegbereiter der modernen Erzählkunst*. Bern 1993.

Gesse, Sven: „Genera mixta“. *Studien zur Poetik der Gattungsmischung zwischen Aufklärung und Klassik-Romantik*. Würzburg 1997.

Hahl, Werner: *Reflexion und Erzählung. Ein Problem der Romantheorie von der Spätaufklärung bis*

- zum programmatischen Realismus. Stuttgart 1971.
- Heine, Heinrich: Zur Geschichte der Religion und Philosophie in Deutschland. In: ders.: Sämtliche Schriften. Hg. von Klaus Briegleb. 2. Aufl. München 1978, Bd. 3.
- Lockemann, Wolfgang: Die Entstehung des Erzählproblems. Untersuchungen zur deutschen Dichtungstheorie im 17. und 18. Jahrhundert. Meisenheim am Glan 1963.
- Scherpe, Klaus R.: Gattungspoetik im 18. Jahrhundert. Historische Entwicklung von Gottsched bis Herder. Stuttgart 1968.
- Schlegel, Friedrich: Kritische Ausgabe. Hg. von Ernst Behler. Abt. 1, Bd. 2. München/Paderborn/Wien 1967.
- Schmitz-Emans, Monika; Lindemann, Uwe; Schmeling, Manfred (Hg.): Poetiken. Autoren – Texte – Begriffe. Berlin 2009.
- Seidel, Sarah: Der Dialog(roman) als anthropologische und poetologische Erzählform der Spätaufklärung – Johann Jakob Engel und August Gottlieb Meißner. In: Gunhild Berg (Hg.): Wissenstexturen. Literarische Gattungen als Organisationsformen von Wissen. Frankfurt am Main 2014, S. 207-225.
- Sulzer, Johann Georg: (Art.) Gespräch. In: *Allgemeine Theorie der Schönen Künste*. Bd. 1. Leipzig 1771, S. 473-476.
- Trappen, Stefan: Gattungspoetik. Studien zur Poetik des 16. bis 19. Jahrhunderts und zur Geschichte der triadischen Gattungslehre. Heidelberg 1998.
- Trappen, Stefan: Handlungsbegriff und Literaturbegriff bei Johann Jakob Engel. Ein Beitrag zur Poetik der Aufklärung. In: Alexander Košenina (Hg.): Johann Jakob Engel (1741-1802). Philosoph für die Welt, Ästhetiker und Dichter. Hannover-Laatzten 2005, S. 123-136.
- Wilpert, Gero von: Sachwörterbuch der Literatur. 8., verbesserte und erweiterte Aufl. Stuttgart 2001.
- Winter, Hans-Gerhard: Dialog und Dialogroman in der Aufklärung. Mit einer Analyse von J. J. Engels Gesprächstheorie. Darmstadt 1974.

小田部胤久『西洋美学史』、東京大学出版会、2009年。

津田保夫「人間学的小説理論としてのブランケンブルク『小説試論』、『言語文化共同研究プロジェクト (2018)』(大阪大学大学院言語文化研究科) (2019)、11-20頁。

フリードリヒ・ニコライ (廣川智貴訳)「ヨハン・ヤーコプ・エンゲルのための追悼文」、『西洋文学研究』(大谷大学西洋文学研究会) 35 (2015)、25-65頁。

廣川智貴「演技術と心理学—J. J. エンゲル『演技のための理念』(1785-86)について—」、『ドイツ文学』(日本独文学会) 144 (2012)、19-33頁。

¹ ブランケンブルクの『小説試論』については、津田保夫「人間学的小説理論としてのブランケンブルク

-
- ク『小説試論』を参照のこと。
- ² 津田保夫「人間学的小説理論としてのブランケンブルク『小説試論』、11 頁以下を参照。
- ³ エンゲルについては、拙訳「ヨハン・ヤーコプ・エンゲルのための追悼文」とそれに付された解説を参照。
- ⁴ Heine: Zur Geschichte der Religion und Philosophie in Deutschland, S. 583.
- ⁵ 『演技のための理念』については、拙論「演技術と心理学—J. J. エンゲル『演技のための理念』(1785-86) について—」を参照。
- ⁶ Frankfurter Gelehrte Anzeigen, Nr. 68, den 25. 8. 1772, S. 539.
- ⁷ Trappen: Handlungsbegriff und Literaturbegriff bei Johann Jakob Engel, S. 127.
- ⁸ 小田部胤久『西洋美学史』、117 頁。
- ⁹ レッシング (斎藤栄治訳)『ラオコオン』、岩波文庫、1991 年、198 頁。
- ¹⁰ たとえば、エンゲルの主著『演技のための理念』も、レッシングの演技論を発展させたものと考えられる。
- ¹¹ Winter: Dialog und Dialogroman in der Aufklärung, S. 122f.
- ¹² Winter: Dialog und Dialogroman in der Aufklärung, S. 124. Vgl. auch Hahl: Reflexion und Erzählung, S. 43-61.
- ¹³ Lockemann: Die Entstehung des Erzählproblems, S. 188.
- ¹⁴ Wilpert: Sachwörterbuch der Literatur, S. 325.
- ¹⁵ Engel an Christian Garve, 2. Dezember 1773.
- ¹⁶ Sulzer: (Art.) Gespräch, S. 473.
- ¹⁷ ジャンルの混合においてエンゲルが占める位置については以下を参照。Scherpe: Gattungspoetik im 18. Jahrhundert, S. 159-168.
- ¹⁸ エンゲルの対話小説については以下を参照。Seidel: Der Dialog(roman) als anthropologische und poetologische Erzählform der Spätaufklärung.
- ¹⁹ Vgl. Engel: Herr Lorenz Stark, S. 101.
- ²⁰ Schiller an Goethe, 23. Dezember 1795.
- ²¹ Rez. in: Neue allgemeine deutsche Bibliothek, 87.1 (1804), S. 190.
- ²² Engel: Herr Lorenz Stark, S. 18.
- ²³ Engel: Herr Lorenz Stark, S. 22.
- ²⁴ Schiller an Goethe, 18. September 1795.
- ²⁵ Schmitz-Emans (Hg.): Poetiken, S. 119.
- ²⁶ Rez. in: Neue allgemeine deutsche Bibliothek, 87.1 (1804), S. 191.
- ²⁷ Schlegel: Kritische Ausgabe, S. 9.
- ²⁸ Fr. Schlegel an Schleiermacher, Mitte August 1798.
- ²⁹ エンゲル詩学におけるメンデルスゾーンの影響については、Trappen: Gattungspoetik, S. 140-172 および Gesse: „Genera mixta“, S. 35-59 を参照。